研究ノート

ゲルマン語 „under“ について

丑　田　弘　忍

周知の如くドイツ語の前置詞（副詞）unter は英語の under「～の下に」と among あるいは between「～の間に」という二つの全く異なる意味を同形の語の中に有している。ドイツ語 unter の語源について語源辞典は概ね次の如くに説明している。

„In dem ***gemeingerm.*** Wort (Adv., Präp.) ***mhd.*** under, ***ahd.*** untar, ***got.*** undar sind zwei urspr. verschiedene Wörter zusammengefallen: 1. ein z.B. mit ***aind.*** antár „zwischen“ und mit ***lat.*** inter „zwischen“ verwandtes Wort; 2. ein z.B. mit ***lat.*** infrā „unter [halb]“ verwandtes Wort, das auf ***idg.*** *n̥dheri „unter“ beruht. Beide Bedeutungen leben noch heute in ‘unter’ weiter..... (Der Große Duden, Etymologie の ***unter*** の項)

„In dem germ. Wort sind zwei verschiedene präp. der Grundsprache zusammengeflossen: idg. ****n̥tér*** ‘innerhalb, zwischen’, und idg. ****n̥dhér-*** ‚unter’.....“ (Friedrich Kluge: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache の ***unten*** の項)

„Schon im Urgerm. sind zwei verschiedene Wörter lautlich zusammengefallen: das eine lateinischen ***inter*** entsprechend mit der gleichen Bed. wie dieses, sich mit ***zwischen*** berührend, von dem es zum Teil zurückgedrängt ist; das andere, verwandt mit ***unten,*** ferner mit lat. ***infra,*** Gegensatz zu über.“ (Hermann

Paul[1]: Deutsches Wörterbuch の *unter* の項)

又 K. Brugmann[2], H. Hirt[3], O. Behaghel[4] らもだいたいこのような考えに立っている。ともあれ印欧語学者はいずれも印欧共通基語 *n̥ter「～の中に，間に」と *n̥dher-「～の下に」という全く意味の異なった，ラテン語の inter「～の間に」と infra「～の下に」に相当する語がゲルマン祖語の中で，形態と意味において一つに合流したと説いている。しかしながらこの説に対する最大の疑問は，現代ドイツ語に現われた unter がゲルマン共通語であるにもかかわらず，ゴート語，英語，北欧語等のゲルマン諸語において，単に「～の下に」の意味しか有していない事実である。もし二つの異なった印欧共通基語 *n̥ter と *n̥dher- が合流したならば，ゲルマン祖語において合流し，あらゆるゲルマン語に伝えられ，ドイツ語と同程度に意味と形態において使用されていなければならないのではないのかと，いう疑問が生じてくる。歴史主義的方法によって編纂された The Oxford Englisch Dictionary (OED) は under を意味の上で24の項目に分類し，その最後に among の意味に使用するのはまれな用法であるとし，古代英語の次の如き文を挙げている。þa ne mehton þa senatus nænne consul under him findan þe dorste on……Ispanie……gefaran (King Ælfred, Orosius, IV, X, 196)「イスパニアへ……あえて赴こうとするいかなる執政官も彼らの間に元老院は見い出すことが出来なかった」

ゴート語の undar(o) は常に「～の下に」を意味していた。ゴート語の文献はごくわずかであるが，ドナウ下流南方のローマの属州モェーシア（今日のブルガリア）で，4世紀末に西ゴートの司教 Wulfila (311-382,

(1) H. Paul は既に大著 Prinzipien der Sprachgeschichte「言語史原理」の §149 で若干この事に触れている。

(2) Karl Brugmann: Kurze vergleichende Grammatik der Indogermanischen Sprachen S. 466 ff.

(3) Hermann Hirt: Handbuch des Urgermanischen, Teil III, S. 41

(4) Otto Behaghel: Die Syntax des Heliand S. 152

または383）の手によってギリシア語原典から訳された聖書断篇の銀写本（Codex Argenteus ウプサラ図書館蔵）が今日伝えられている。ゴート語はゲルマン語の最初の文献を残しており，又その古さの為ゲルマン祖語の姿をまだとどめているといわれ，その文献は比較ゲルマン語学の上ではすこぶる重要である。その中の undar (o) の例をギリシア語原典，ゴート語訳，ラテン語訳の順に挙げておく。Hieronymus によって訳されたラテン語訳聖書 Vulgata は，383年，即ち Wulfila の死去の年頃に着手され，405年に完成されたので，直接には関係がないが，比較対照の為一応挙げておく：(5)

マルコ　IV, 21　*καὶ ἔλεγεν αὐτοῖς· μήτι ὁ λύχνος ἔρχεται ἵνα ὑπὸ τὸν μόδιον τεθῇ ἢ ὑπὸ τὴν κλίνην;*

jah qaþ du im: ibai lukarn qimiþ duþe ei uf melan satjaidan aiþþau undar ligr?

Et dicebat illis: Numquid venit lucerna ut sub modio ponatur, aut sub lecto?

また彼らに言われた，「ますの下や寝台の下に置くために，あかりを持ってくることがあろうか。」

マルコ　VI, 11　*ἐκπορευόμενοι ἐκεῖθεν ἐκτινάξατε τὸν χοῦν τὸν ὑποκάτω τῶν ποδῶν ὑμῶν εἰς μαρτύριον αὐτοῖς·*

usgaggandans jain ro ushrisjaiþ mulda þo undaro fotum izwaraim du weitwodiþai im.

nec audierint vos, exeuntes inde, excuite pulverem de pedibus vestris, in testimonicem illis.

あなたがたの話を聞きもしないところがあったなら，そこから出て行くとき，彼らに対する抗議のしるしに足の裏のちりを払い落しなさい。

---

(5)　ギリシア語原文とゴート語訳は W. Streitberg 編 Die Gotische Bibel, 4. Aufl. 1965，ラテン語訳は Biblia Sacra, 1965, Paris. 日本語訳は日本聖書協会発行のものを利用した。

マルコ VII, 28 *καὶ γὰρ τὰ κυνάρια ὑποκάτω τῆς τραπέζης ἐσθίει ἀπὸ τῶν ψιχίων τῶν παιδίων.*

jah auk hundos undaro biuda matjand af drauhsnom barne.

nam et catelli comedunt sub mensa de mices puerorum.

でも，食卓の下にいる小犬も，子供たちのパンくずは，いただきます。

ここに挙げた三例のゴート語 undar(o) は常に「～の下へ（で）」を意味するのみである。マルコ IV, 21 で Wulfila はギリシア語 *ὑπό* ＋ 対格「～の下へ」を uf と undar に訳したが，意味の差はない。Vulgata では ponatur（接続法・受動態）＋ sub ＋ 奪格に訳された。マルコ VI, 11 ではギリシア語「あなたがたの（*ὑμῶν*, 複数属格）足の（*τῶν ποδῶν*, 複数属格）下の（*τὸν ὑποκάτω* 副詞）ちりを（*τὸν χοῦν*）」から語順も同じく直訳的にゴート語に訳されている。「あなたがたの izwaraim, 所有代名詞，複数，与格）足の（fotum，複数，与格）下の（þo undaro, 副詞）ちりを（mulda）」ラテン語訳では de（von）を伴なって単に「あなたがたの足のちりを」とのみ訳された。マルコ VII, 28 も *ὑποκάτω*（前置詞）を undaro と訳し，ラテン語訳では sub と訳された。このように wulfila のゴート語はギリシア語原典の直訳体であることが多く，ゴート語の真の姿であるかどうか判断するのは容易なことではない。実際この undar(o) も例は少く，「～の下に」を表わすのには専ら uf が用いられている。この uf は印欧語 *upo に由来し，その原義は「下から上に」を意味し，ギリシア語 *ὑπό*「～の下に」，ラテン語 sub「～の下に」，ゴート語 uf「～の下に」（但し接頭辞としては「上に」を表わす）として現われる，しかし古高地ドイツ語に現われた uf は「下から上へ」の「上へ」の意味だけを有するに至り，auf として現代ドイツ語に伝えられているのも興味ある事実である。

さて印欧語 *n̥ter「中に，間に」は各語においていかに展開されるであろうか。そもそも *n̥ter は *enter の弱まった形である。即ち *-ter にアクセントが落ちたため *en>*n̥ となった。*n̥ter は印欧語対応の法則に従えば，-ter の部分が子音で始まっている為，ラテン語では *n̥ は in-<*en- となり，全体で inter となる。これは元来 in「～の中に」に -ter という接尾辞が接合したものと考えられる。-ter はギリシア語 -τερο-ς，サンスクリット -tara に対応する。もともとこの接尾辞は形容詞の比較級の形態要素である（ギリシア語 σοφός「賢い」の比較級 σοφώτερος，サンスクリット dhimat「賢い」の比較級 dhīmattara など）だがしかし古くは「～よりもより～」というような相対的な比較を表わしていたのではなく，上に対して下，外に対して内などのように一対のものの対照比較を意味していた。(6) それ故 inter は exter「外に」との対照において初めて意味をなし得た。こうしてこの -ter はラテン語において代名詞，形容詞，副詞，前置詞にとり入れられた。noster（ギリシア語 ἡμέτερος「我々の」）に対して，vester（ὑμέτερος「汝等の」）や dexter（δεξιτερός「右」）に対して，sinister（ἀριστερός「左」）などのように元来対照比較の機能を有していたことが理解できよう，さらに -ter は対照のみならず，「より～」と比較の色合が濃厚となり，inter は「～よりもより内に，より中に」の意味となり，さらに「二つの物の間にわけ入って」„drinnen zwischen zweien“ の意味を有するに至った。つまり前置詞としての inter の原初的な形態 inter A et B「AとBの間に」で表わされるに至った。例えばmons Iura est inter Sequanos et Helvetios (Caesar, Bellum Gallicum I, 2)「イウーラ山はヘルウェテー族とセークヨニー族の間にある」それと同時にその意味は敷衍され「全体の間の～」を示すに至った。quorum inter Gallos uirtutis opinio est singularis (id. II, 24)「ガリア人たちの間で，その者たちの武勇の聞は高い」

Satəm 群，そのサンスクリットでは印欧語 *n̥ter は音韻対応の法則に

(6) R. Kühner : Ausführliche Grammatik der Lateinischen Sprache. Teil I, S. 561 f.

従えば *atar とならねばならないが，しかし文献上は antár の形しかない。アヴェスタ語は *atarə が推定されるが，文献上は antarə，又ギリシア語は *ἀτέρ が推定されるが，*n̥ter より派生したと思われる語は ἔντερον「腸」である。「内へ」を表わす副詞 ἐντός は全く別の共通基語 *entos「内へ」から出ている。そのラテン語の形は intus である。又 ἄτερ「～から離れて」は全く別の語である。なに故サンスクリットで音韻対応の法則に従って *atár とならなかったかという事に関して，泉井教授は，インド・イラン語時代に入ってから独立の要素 *en に接尾辞 *ter を付して構成せられた合成語的な性格をもっていて，原構成要素ではないと述べておられる。(7) 即ち印欧祖語からの直接の遺産ではないと考えておられる。19世紀の青年文法学派（Junggrammatiker）は「音韻法則に例外はあり得ない」と言っているが，最近の言語地理学の研究はそれと反対の結論を示している為，一概に決定することは困難である。

ゲルマン語では *n̥ter の *n̥ は子音の前では un となり，ゲルマン祖語においては全体で *under になったと推定される。*-ter の部分はグリムの法則によれば印欧語 *t は第一次音韻推移の為 *þ に変化する。さすれば *n̥ter はゲルマン祖語で *unþer にならねばならない。しかしながら *-ter にアクセントが落ちているため，ヴェルナーの法則に従って *t は *d となる。即ち印欧語 *bhráter は paenultima にアクセントがあるため，ゴート語では broþar となったが，*pətḗr は ultima にアクセントがあるため，ゴート語では fadar となったと同様である。ゲルマン語において *n̥ter はゴート語 undar，古代英語 under，古代ザクセン語 undar，古代北欧語 undir，古代高地ドイツ語では第二次子音推移による d>t の為 untar，中世高地ドイツ語 under，そして現代ドイツ語 unter となる（上記の順に -ter の部分は fadar, fæder, fadar, fadir, fatar, vater, Vater と変化するのと同様である）このように印欧語 *n̥ter から言語学上確実に現代ドイツ語 unter が導き出される。

他方「下に」を意味する印欧形 *n̥dher- はラテン語では，*n̥- は in-

(7) 泉井久之助：言語の世界，243頁

,*dh は f となり，全体で infer となる。形容詞 inferus「下の」はその古い形 *enferos，印欧形 *n̥dheros が推定される。前置詞 infra「～の下に」は inferus の女性単数処格形 inferā の語中母音脱落形であると思われる。supra「～の上に」も古い形においては supera の形を保持しており，形容詞 superus「上の」，印欧語 *uperos に由来している。*n̥dheros はサンスクリットでは *n̥- は a-，*-dh- は -dh-，*-er は -ar，*-os は ah̥ となり，全体で adharah̥ となる。ゲルマン語では *n̥- は *un-，*-dh- は *-d-，*-er は *er となり，ゲルマン祖語 *under が推定される。それはそれぞれ，ゴート語 undar(o)，古代英語 under，古代ザクセン語 undar，古代北欧語 und(ir)，古高ドイツ語 untar とし現われ，現代ドイツ語 unter になり得る。ゲルマン語に入った *under は，その推移において，*n̥ter に由来する形と全く同形となり得た。

このように形の上では言語学上 *n̥ter と *n̥dher- はゲルマン語において *under の形で表わされ得たが，事実上そのラテン語の形 inter と infra に匹敵する語が意味においても合流しているか，どうかその用法を歴史的に考察してみよう。先に例示した如くゴート語 undar(o)には inter の意味は全くなかった。それでは inter の意味がゴート語でいかに表現されているか，そのいくつかを例示してみよう：

マタイ　XI, 11　*οὐκ εγήγερται ἐν γεννητοῖς γυναικῶν μείζων Ἰωάννου τοῦ βαπτιστοῦ·*

ni urrais in baurim qinono maiza Iohanne þamma daupjandin.

non surrexit inter natos mulierum major Joanne Baptista.

女の産んだ者の中で，バプテスマのヨハネより大きい人物は起らなかった。

マルコ　X, 43　*οὐχ οὕτως δὲ ἔσται ἐν ὑμῖν·*

i ni swa sijai in izwis.

Non ita est autem in vobis.

しかしあなたがたの間では，そうであってはならない。

ヨハネ VII, 12　*καὶ γογγυσμὸς πολὺς περὶ αὐτοῦ ἦν ἐν τοῖς ὄχλοις·*

jah birodeins mikila <bi ina> was in managein.

Et murmur multum erat in turba de eo.

群衆の中に，イエスについていろいろとうわさが立った。

「～の間に」をゴート語で表わす一つの方法は in で，この用法は非常に多く，印欧語 *en「～の中に」に遡り，ギリシア語 *ἐν*，ラテン語 in（古形 en）に対応する。その原義は「～の中に」であって，ある一定の空間の範囲を，かつ他の事物に囲繞されている様を表わしたため，「～の間に」をも同時に表わし得た。inter が in「～の中に」を語根としていることも考慮に入れられよう。このような用法は古典ラテン語にもしばしば見られる，in his fuit Ariovistus (Caesar, Bellum Gallicum I, 53)「彼らの中（間）にアリオウィストウスがいた」マタイ XI, 11 のゴート語 baurim は baur「生れし者」の複数与格形である。in は現代ドイツ語と同様静止した場所を表わす場合与格を支配する。マルコ X, 43 の izwis は人称代名詞 jus「あなたがた」の与格形である。ヨハネVII, 12 で注目すべきは managein という語である。これは managei「群集」の単数与格形であり，印欧語 *men(e)gh-「多くの」から出ており（*gh はゲルマン語で g となる），形容詞 managsr「多くの」（現代ドイツ語 mancher）の名詞形であり，現代ドイツ語 Menge として，古代英語 menigu として現われる。現代英語 among は a と mong とに分析される。a- は in (on) を表わし，-mong は mengue と同系であり，実にその原義は「群集の中(間)に」(on menigeo) を意味した。それ故 among の成立は比較的新しいと言えよう。

ヨハネ X, 19　*σχίσμα οὖν πάλιν ἐγένετο ἐν τοῖσ Ἰουδαίοις διὰ τοὺς λόγους τούτους*

þanuh missaqiss aftra warþ miþ Iudaium in þize waurde.

Dissensio iterum facta est inter Judaeos propter sermones hos.

これらの言葉を語られたため，ユダヤ人の間にまたも分争が生じた。

マルコ　I, 27　*καὶ ἐθαμβήθησαν πάντες ὥστε συζητεῖν πρὸς ἑαυτοὺς λέγοντας·*

jah afslauþnodedun allai sildaleikjandns, swaei sokidedun miþ sis misso qiþandans.

Et mirati sunt omnes, ita ut conquirerent inter se dicentes.

人々はみな驚きのあまり，互に論じて言った。

ヨハネ　XVI, 19　*περὶ τούτου Ζητεῖτε μετ' ἀλλήλων ὅτι εἶπον·*

bi þata sokeiþ miþ izwis misso þatei qaþ.

De hoc quaeritis inter vos quia dixi.

わたしが言ったことで，互に論じあっているのか。

マルコ　VII, 31　*καὶ Σιδῶνος ἦλθεν πρὸς τὴν θάλασσαν τῆς Γαλιλαίας ἀνὰ μέσον τῶν ὁρίων τῆς Δεκαπόλεως.*

jah Seidone qam at marein Galeilaie miþ tweihnaim markom Daikapaulaios.

venit per Seidouem ad mare Galilae inter medios fines Decapoleos.

シドンを経てデカポリス地方を通りぬけ，ガリラヤの海べにこられた。

これらは miþ で表わされている。miþ は印欧語語根 *me-「真中で」に由来して，印欧語 *medhi- に現われる。ギリシア語では *μετά* とな

る。ゲルマン語では *-dh- は *d, *e はウムラウトの現象に立たされ，次のシラブル *i 音のため *i と変化し，ゲルマン祖語 *midi が推定される。これはゴート語では *d は þ と変化し，*i は語末の為消滅し，miþ として現われる。古代英語では mid，古高ドイツ語 mit で現われ，現代ドイツ語に伝えられている。現代ドイツ語の mit は「～と共に」とそれに付随する意味しか有していないと思うが，その原義は「～の真中，～の間」を意味していた。そのような用法はギリシア語では叙事詩に，特にホメーロスにしばしば見受けられる。*μετὰ πάντας ὁμήλικας* (Ilias IX, 54)「同年輩の者の間で」，*μετ' Ἀχαιῶν νηυσὶν* (Ilias XIII, 668)「アカイア軍の船の間で」，*μετὰ δμώων τ' ἐνὶ οἴκῳ πῖνε καὶ ἤσθ'*，(Odyssee XVI, 140)「家では召使の中にあって，飲んでそして食べた」このように「召使の間にいること」はとりもなおさず「召使と共にいること」に転用される可能性を充分有している。現代ドイツ語は原義を失い転用された意味のみを保っているが，古高ドイツ語には依然としてこの用法はある。

現代の北欧語（デンマーク語，スウェーデン語）の med も「～と共に」の意味しか有していないと思うが，しかし古代北欧語による最大の文学的所産である歌謡集「エッダ」（成立年代 800—1100年と推定されている），現在コペンハーゲンの王立図書館に所蔵されている Codex Regius（王の写本）において med は，依然として「～の間に」の意味を有している，hrat er med ásom, hvat er med álfom? (Vǫlospá 48)「アース神の（ásom, áss の複数与格形）間で（med）何が（hvat）あるのか（er）？妖精の（álfom, álfr の複数与格形）間で何があるのか？」iord heifir med mǫnnom (Alvissmál 10)「人間たちの間では大地と呼ばれている」

先に挙げたヨハネ X, 19 の miþ Iudaium「ユダヤ人の間に」はギリシア語 *ἐν*「～の中に」が訳された。マルコ I, 27 の miþ sis「彼ら自身の間で」はギリシア語 *πρὸς ἑαυτοὺς* が訳された。*πρός* は意味によって，属・与・対格を支配する。*ἑαυτούς* は男性・複数・対格形であるから，*πρός* は事物間の関係を表わし，*πρὸς ἑαυτούς* は直訳すれば「彼ら自身

の間の関係において」となる。ヨハネ XVI, 19 の μετ' ἀλλήλων の ἀλλήλων は相互代名詞・複数・属格形で「互いに」を意味する，直訳すれば，「互いの間で」となる。ゴート語はこの語を misso「お互いに，（副詞）」と訳し，さらにギリシア語にはない izwis「あなたがた」を補っている。ラテン語訳は単に「あなたがたの間で」としただけである。マルコ VII, 31 では miþ はギリシア語 ἀνά を訳した。ἀνά は「～を通りぬけて」で，その部分を直訳すれば，「デカポリスの地域（国境〔複数形〕）の中央を通り抜けて」である。ゴート語 miþ tweihnaim markom Daikapaulaios は直訳すれば「デカポリスの両方の境界の間を」となる，ラテン語訳 inter medios fines Decapoleos は「デカポレオスの地域（境界〔複数形〕）の真中（間）を通り抜けて」と直訳される。ὅριον も finis も「境界」の意味であるが，その複数形は，「複数の境界に挟まれた一定の空間」，即ちその「地帯」を表わす，これをゴート語では「両方の境界の間」という迂言的な様式で表現せねばならなかった。ゴート語 tweihnaim は tweihnai「2」の与格形である。起源的には印欧語 *duōu「2」に遡る。印欧語 *d はゴート語で t となり，twai として現われ，第二次子音推移により，t>z となり，古高ドイツ語で zwēne，現代ドイツ語 zwei となった。*duōu と並列した形 *duci に接尾辞 *-no- が付いてゴート語 tweihnai が，又古代英語 tweonum が作られ，be（=by「～の間」）との合成語 betwēonum（原義的には「両方の間で」）が出来，今日の英語 between に至っている。この betwēonum の成立以前には古代英語でもやはり mid が用いられていた。Déma mid unc twih（創世紀 XVI, 5）「我々二人の間の裁判官」はゴート語の miþ tweihnaim markom と同様の表現であり，ラテン語 inter の原初的な意味，「二者間の間」を意味している。因みにこの部分の Vulgata 訳は Judicet Dominus inter me et te「主があなたと私の間をおさばきになりますように」又接尾辞 *-ko- をともなった形 *duisko より古高ドイツ語 zwisk「二重の」が出来，その複数与格形 zwiskēn「両方」は，untar (in) zwisken「両方の間で」の如くに使われていたが，前置詞 untar (in) が省略され，

zwisken が単独で「～の間」の意味として使われ zwischen の形で現代ドイツ語に伝えられている。それ故その用法は比較的新しいと言うことが出来よう。

ルカ　IV, 30　αὐτὸς δὲ διελθὼν διὰ μέσου αὐτῶν ἐπορεύετο.
iþ is þairhleiþands þairh midjans ins iddja.
Ipse autem transiens per medium illorum, ibat.
しかし，イエスは彼らのまん中を通り抜けて去って行かれた。

マルコ　IX, 36　καὶ λαβὼν παιδίον ἔστησεν αὐτὸ ἐν μέσῳ αὐτῶν
jah nimands barn gasatida ita in midjaim im
Et accipiens puerum, statuit eum in medio eorum
そして，ひとりの幼な子をとりあげて，彼らのまん中に立たせ，

ルカ　VIII, 7　καὶ ἕτερον ἔπεσεν ἐν μέσῳ τῶν ἀκανθῶν, καὶ συμφυεῖσαι αἱ ἄκανθαι ἀπέπνιξαν αὐτό·
jah sum gadraus in midumai aurniwe, jah miþuskeinandans þai þaurnjus afhapidedum þata.
Et aliud cecidit inter spinas, et simul exortae spinae suffocaverunt illud.
ほかの種は，いばらの間に落ちたので，ばらも一緒に茂って来て，それをふさいでしまった。

ルカ　XVII, 11　καὶ αὐτὸς διήρχετο διὰ μέσου Σαμαρίας καὶ Γαλιλαίας.
jah is þairhiddja þairh midja Samarian jah Galeilaian
transibat per mediam Samariam et Galilaem.
サマリアとガリラヤとの間を通られた。

これらはゴート語では midjis「中央の」が用いられて「～の間」を表現するものであり，印欧語 *medhio-「中央の」に由来する。これはギリシア語では μέσος（古形 *μεθιος），ラテン語 medius，古代北欧語 midr，古高ドイツ語 mitti として現われ，現代ドイツ語 Mitte に伝えられている。先に例示したマルコ VII, 31 の ἀνὰ μέσον τῶν ὁρίων は「境界の中央を通り抜けて」であったが，その「中央」はまさしく真中を指しているのではなく，「境界の間」となり得ることは文脈から解されよう。このように μέσος は μέτα と同様印欧語共通語根 *me-「まん中に」を基体としているが故，その派生語は容易に「～の間」となりやすい。因みに同源から派生した古代教会スラヴ語の mežďu は「～の真中，～の間」の意味を有しているが，起源的には mežda「境界」の双数処格形で「両方の境界において」であった。(8)

ルカ IV, 30 のギリシア語 διὰ μέσον αὐτῶν「彼らの（αὐτῶν 複数属格形）真中（間）を（μέσον 対格形）通り抜けて（διά）」をゴート語では þairh「～を通り抜けて，前置詞，対格支配」midjans「中央の，形容詞，男性複数対格形」ins「彼らを，男性複数対格形」と訳され，直訳的に「中央の彼らを通り抜けて」ではなく，「彼らの中央（間）を通り抜けて」と訳すべきであるが，このような形容詞の用法は印欧語全般に見られる。(9) 即ち in media urbe は「中央の町で」(10) ではなく「町の中央で」の意味である。この用法は名詞の場合だけであってギリシア語同様代名詞の場合には例文のように medium + illorun とする。マルコ IX, 36 も同様で，in midjaim（複数与格形）im（複数与格形）は「彼らの中央で」である。又これらは他の二つ以上の事物によって囲まれている様子を表現するが故に，当然「～の間に」とも訳しうる。ルカ VIII, 7 はギリシ

(8) K. Brugmann : op. cit. S. 453
A. Leskien : Handbuch der Altbulgarischen Sprache, S. 111

(9) H. Hirt : op. cit. S. 88

(10) この意味なら in urbium medissima とするほかないであろう。ギリシヤ語ではこの意味では ἡ μέρη πόλις「町の中央」なら μέση ἡ πόλις あるいは ἡ πόλις μέση となる。

ア語 ἐν μέσῳ τῶν ἀκανθῶν「いばらの（ἀκανθῶν, 複数属格形）中央に（μέσῳ 与格形）おいて（ἐν）」をゴート語では in「において」midumai「中央，与格形」[11] þaurniwe「いばらの，複数属格形」と直訳された。ラテン語は明確に inter spinas と訳され，「～の間に」の意味は一層確実となっている。ルカ XVII, 11 は「～と～との間」の用法であるが，ギリシア語 διὰ μέσου Σαμαρίας καὶ Γαλιλαίας「サマリアとガリラヤの中央（間）を通って」をゴート語では þairh「を通って」midja「中央の」Samarian（対格形）jah「と」Galeilaian（対格形）と直訳されている。ラテン語では inter A et B でも可であるが，ギリシア語から直訳されて，per「通って」mediam「中央の」……とした。

このように「～の真中，中央」は物と物とに挟まれた空間の中央を示しているが為，ただちに「～の間」という意味になり得る。今まで挙げた用法以外に「ある複数的・集合的存在における（間の）いくつか」というようなある範囲への介在，あるいは範囲からの抽出を表現する場合，何ら前置詞を用いることなく属格（部分の属格）のみを用いる語法も見られる。

ヨハネ　VI, 64　ἀλλ' εἰσὶν ἐξ ὑμῶν τινες οἱ οὐ πιστεύουσιν.
akei sind izwara sumai, þaiei ni galaubjand.
Sed sunt quidam ex vobis, qui non credunt.
しかしあなたがたの中には信じない者がいる。

izwara「あなたがたの，複数属格形」sumai「ある人々，男性複数主格形」ギリシア語もラテン語訳も ἐξ (ἐκ), ex「中からの」を用いている。又与格だけを用いる例も見受けられる：

マルコ VIII, 19　ὅτε τοὺς πέντε ἄρτους ἔκλασα εἰς τοὺς πεντακισχιλίους.
þan þans fimf hlaibans gebrak fimf þusundjom

(11)「～（の中）へ」の場合，当然対格形が予想されるが，ゴート語では in＋与格形が多い。Krause は古い用法の処格（Lokativ）の継承であるとしている。
Wolfgang Krause : Handbuch des Gotischen, S. 208

quando quinque pones fregi in quinque milla.

五つのパンをさいて五千人に分けた時

ギリシア語もラテン語訳も前置詞 εἰς, in「～中へ」が付せられており，原義的にも，in>inter で「中へ」は「間へ」となりやすく上例も集団の範囲を限定的に示して「五千人の間で」と充分訳し得る。ゴート語では単に直訳すれば「五千(人)に，与格形」としたにすぎない。

今まで挙げた例は空間的な「～の間」であったが，では一体時間的な「～の間」，つまり während des Krieges のような表現はゴート語でどのように表わされるであろうか。これには in が頻繁に用いられている。in dagam Herodes Iudaias（ルカ I, 5）「ユダヤの王ヘロデの世に」in dagam jainaim（ルカ IV, 2）「その間」，これらはギリシア語 ἐν ラテン語 in で表わされ，共に印欧語 *en に由来するが，その原義は「～の中に」であって，先に見たように，多くは空間的に使用されたが，時間的な意味にも押し拡げられ，「ある一定の期間の中に」から「～の間に」を表わすようになった。又時間的な「～の間」には uf「～の下に」も用いられている，uf Haileisaiu praufectau（ルカ IV, 27）「予言者エリシヤの時代に」の如き表現は「～の下に」から派生した比喩的な転義的用法と言える。とまれ「～の下に」はある事物への帰属を意味し，その物の支配を受ける事を意味している。この際その意味は時間にも当て嵌められる。ラテン語の sub nocte「夜の間に」は「夜の極致の下で」を意味しよう。OED も under night の例で „the cover or schelter of darkness“ と説明している。現代北欧語の under もこのような「～の下」から，時間的な「～の間」へと比較的新しい時代に転用された語である。

以上でゴート語における「～の間」の表現様式を取り挙げたが，そこでは in や，同じ語根に属している mi-, midjis が専ら用いられていた。これらは起源的に物に挟まれた「中央，真中，間」の意味を有しており，ラテン語 inter の意味要素を充分に網羅している。

先に北欧諸語には「～の間」の意味で under を用いることはないと述べたが，やはり空間的な意味でそのように用いることはないと思う。近代

デンマーク語も da sad hun under det dejligste juletræ (H. C. Andersen, Den lille pige med svovlstikkerne)「それから彼女は非常に美しいクリスマスツリーの下に座っていた」のように「〜の下に」を表わしているが，しかし時間的に「〜の間」という場合のみ，underで表わす。デンマーク語では under krigen「戦争の間」のように表わすが，このことはスウェーデン語においても同様である。では空間的な「〜の間は」北欧語ではどのように表わすのであろうか。デンマーク語の den blå røg gik ligesom skyer ind imellem de mørke træer (H. C. Andersen, Den grinme Ælling)「青い煙は雲の如く，暗い樹々（複数形）の間を流れた」に見られるように imellem（iはドイツ語のinに相当する），か若しくはiの省略された形 mellem が用いられる。この語はゴート語 midjis と同様印欧語根 *me-「真中」に由来し，北欧祖語において *medal, *midil, midli として現われ，その意味は原義的に「真中」を表わしていたが，midli の l の為，d が l に進行同化（progressive assimilation）した形 milli に î, â を付して î (â) milli「真中において」によって「〜の間に」とその意味を変針させた。ゴート語の箇所で述べたように「真中に」が「間に」の意味へと変化する傾向が北欧語においても非常に古い時期（すでにエッダの時代）に生じている。古代北欧語においてはゲルマン祖語 *under は undir（文献上は -ir の脱落した形 und も見られる）となって現われる。エッダにおいて，und は約40例，undir は約30例ほど見られる。エッダからその例を挙げると，svangri und sǫdli (Helgaqvida Hundingsbana in fyrri 42)「細い鞍の下で」(sæ), er und olli stendr (Vǫlospá, 20)「木の下にあるところの（海）」undir heidvǫnom helgom badmi (Vǫlospá 27)「澄んだ天に聳ゆる聖なる木の下に」これらはまさしく「ある物の下に」を表わしている，「〜の下」には相違ないが修辞的な表現として，Konung und hiálmi [12] (Helgaqvida

(12) cf. 古代英語 Wedera leód heard under helme (Beowulf, 342)「かぶとの下のイエーアト人らの王」中高ドイツ語 wie sihe ich friunde mîne under helme gân? (Nibelungenlied 1861)「見るところなぜわが親族はかぶとをかぶってやって来たのか」

Hundingsbana ǫnnor, 14)「兜の下の(をかぶった)王」scip, er und þér scríđi (do. 32)「お前の下で進んでいる(乗った)船」も見られる。さらに転義的に上下の関係を取り去った単なる位置を表わすこともある, undir hvera lundi (Vǫlospá, 35)「盆地の森で」又ある物あるいはある人への帰属を表わす, hálfr er auđr und hvǫtom (Hávamál 59)「富は半ばすばしこい者たちの下（手の中）にある」

このように古代北欧語の und (ir) は常に「～の下に」か若しくはそれに最も近似的な転義的な意味しか有していない,「～の間」を表わす様式は既に挙げた頻繁に用いられる međ とエッダには数少ないが milli である。milli の語義については既に述べたので, エッダに現われたその用例をあげてみよう。átta nætr sat ec milli elda hér (Grímnismál 2)「八夜の間, 私は火の間に坐っていた」, あるいは á(i) milli(ドイツ語の inmitten に相当する) の形で, O'friđr oc dylgior vóro á milli eira Hundings Konungs oc Sigmundar Konungs (Helgaqviđa Hundingsbana ǫnnor)「フンデング王とシグムント王の間には不和と敵意があった」これはまさしく inter の原初的な意味形態 inter (á milli 属格支配) A et (oc) B を示している。Liggi occar enn í milli málmr hringvariđr (Sigurđarqviđa in scamma 68)「わたしたちの間に再び剣を置いて下さい」又時間的な「～の間」は専ら á（ドイツ語の in, an）が, á vetrum「冬の間」のように用いられており, 近代語のように, und (ir) の例は見られない。又接続詞としての「～の間」もやはり *me- を語根とする medan「～の間(現代スウェーデン語 medan, 現代デンマーク語 medens)」が用いられている。なお現代北欧語の時間的な「～の間」を意味する under は先にも述べたように「～の下」から発展した転義的用法と言える。

今まで「～の間」の意味の表現様式をゴート語, 古代北欧語について概観して来たが, ゴート語では miþ, midjis, 古代北欧語では međ, milli が主に使用せられている。これらは印欧語根 *me-「真中で」から派生した語であり,「真中に」から「間に」の意味に移行しやすい事はすでに述べ

た。上記のゲルマン語には inter の意味での under は現われていない。特に inter の原初的な意味形態 inter A et B には上に挙げた語が用いられている。古代ゲルマン語において inter の意味で under を使用した形跡は認められないところからして，恐らく印欧語 *n̥ter はゲルマン語 under の中に入っていないのではないかと思われる。

日本語で「大勢の下」は「大勢の間」と容易になりうるが，ラテン語でも「〜の下に」を表わす sub も「〜の間に」となることもある，sub armis esse (Caesar, Bellum Civile 141)「武器の下にいる」は転義的に「武器の間にいる」ともなりうる。ギリシア語の「〜の下に」は *ὑπό* で表わされるがこのような転義的意味は「ホメーロス」にすでに現われている。*νύμφας δ' ἐχ θαλάμων δαΐδων ὕπο λαμπομενάων/ἠγίνεον ἀνὰ ἄστυ* (Ilias, XVIII, 492-3)「彼らは花嫁たちを奥の間から光輝く松明の下（間）を町を通って連れ出した」又 under「〜の下に」と同系のラテン語 infra「〜の下に」も「〜の間」の意味にもなり得ると思われる。(uri) sunt magnitudine paulo infra elephantos (Caerar, Bellum Gallicum, VI, 28)「ウリーは大きさにおいていくらか象以下である（よりも小さい)」，この infra は，大きさ，価値等，物の優劣を定める場合，「ある集団の間に分け入ったならば」，より劣っている事を表わしているであろう。古代英語の under に現われる「〜の間」を意味するわずかばかりの例はこのような「〜の下」からの転義的用法にすぎないと思われる。それは時間についても同じであるが，時間の方がより大幅であるといえよう。しかしこのような場合 inter A et B の形式にはなり得ないであろう。互に異なる言語の特に語源を異にする場合の語の意義の変遷からの類推は危険であると思えるかもしれないが，語源が異なっていても原義が同一である場合には後に同一の意味に敷衍される事がしばしばある。卑近な例であるが，「（広い意味での）傘」はドイツ語で Schirm，英語で umbrella であるが，前者はゲルマン祖語 *skema に由来し，「盾のカバー」をその原義としている，後者はラテン語 umbra から出ており，「陰」を意味している，即ち前者は被覆する対象を示し，後者は被覆される対象を示して

いる。共に被覆をその共通の意味としているが為，「傘」なる意味が生じるに至った。

L. Bloomfield は浩瀚な著作「言語」において，英語の understand は古い時代に stand under を意味していたと推測している，そのことは一応首肯し得るとしても，その理由付けとして，ドイツ語 unter は among の意味を有しているが故に，I understand these things は最初 I stand among these things であったろうとしている。[13] しかしながら別の箇所で，under における among の意味は先史（文献以前）時代以来廃用になっていると説いている。[14] しかしこの説明にはいささか問題がある。最近のゲルマン語史研究の教えるところによると，[15] 紀元前後には Elbgermanen, Weser-Rhein-Germamanen, Nordsee-Germanen（フリーズ人，アンゲル人，ザクセン人），Nordgermanen, Ostgermanen（ゴート人，ヴァンダール人，ブルグント人）の五つのゲルマン部族が存在していたと推定される。この頃にはすでに言語の分化が始まっており，4世紀中頃に Wulfila のゴート語聖書翻訳がなされ，5世紀にはアンゲル人，ザクセン人のイギリス占領がなされた。ドイツ語は5世紀以来，北海ゲルマン語（Nordseegermanisch），ヴェーザーライン＝ゲルマン語（Weser-Rhein-Germanisch），エルベ＝ゲルマン語（Elb-Germanisch）が互に影響しあって成立したものと考えられている。もし印欧語 *n̥ter がゲルマン語に入り，ゲルマン語分化以前に廃用されたとするならば，ドイツ語の中に inter の意味で生き続けていると考えるのは不合理である。それ以後に廃用されたとしてもゲルマン祖語に最も近いと思われる Wulfila に現われず，ゲルマン諸部族間で互に交流があった[16] とみられる中で，5世紀に合成されたと考えられるドイツ語の中で生きつづけたとするのは不自然と言わねばならない。又廃用されたと仮定しても，ドイツ

(13) Leonard Bloomfield : Language p. 425 f.

(14) Bloomfield : op. cit., p. 433

(15) Hugo Moser : Deutsche Sprachgeschichte S. 86 ff.

(16) Friedrich Maurer : Nordgermanen und Alemannen, S. 85

語と他のゲルマン諸語の間の使用頻度の差が激しすぎる。やはりゲルマン語には *n̥ter は入らなかったと考えられよう。Bloomfield が挙げている understand は，I stand among these things を意味するのではなく，I stand under these things「私はこれらの事物の下に立っている」を意味していると思われる。即ち「これらの事物によって被覆されている」事を示している，決して under は inter として用いられていず，古ゲルマン語の時代には mid が用いられていた。英語の among, between, zwischen は分化後の比較的新しい時期に成立した語であるが，一方北欧語は保守的に古くからの milli を保持している。

古高ドイツ語（約600—1100）による最古の文学作品「ヒルデブラントの歌」（800年頃の写本が伝えられている。成立はさらにさかのぼる。）に次のような一句がある。Hiltibrant enti Hadubrant untar heriun tuem「2つの（tuem，与格形）軍勢（heriun，複数与格形）の間に，ヒルデブラントとハードゥブラントは」，まさしくこの表現は「両者の間」を示し，ゴート語 miθ tweihnaim markom「両方の境界の間」と同様の表現であり，このように比較的古い時代[17]に「両者の間」を示す，ラテン語 inter の原初的な意味で使用せられているが故，「〜の下」からの転義的用法とは言い難い。

現代ドイツ語で「2者の間」を表わす inter の本来の意味 inter A et B で，ich stehe zwischen ihm und ihr とは言えても，ich stehe unter ihm und ihr は正確な表現とは言えないであろう。しかしこのような unter の用法は古高ドイツ語にしばしば見受けられる，untar himile anti erder「天と地の間で」then ir slougut untar themo temple inti them altare (Tatian，マタイ XXIII, 35)「かの者を聖所と祭壇との間であなたがたが殺した」イシドールの文章のラテン語 spiritus meus erit medio uestri (de trinitatis significantia)「私の魂はあなたがたの間にあるでしょう（未来形）」は古高ドイツ語に Miin gheist

(17) Hans Eggers は「ヒルデブラントの歌」の成立を六世紀，遅くとも七世紀の初めであると推測している。H. Eggers: Deutsche Sprachgeschichte. I. S. 229

scal uuesan undar eu mittem（ゲルマン語には現在形と過去形しか存しないので未来表現は助動詞 scolan（＝sollen）で代用されている。du の複数与格形 in はイシドール[18]では eu で現われる）」と訳された。ともあれ in medio＝mitten「真中で」は undar「～の間で」でさらに補強され，「～の間」の意味を一層強めていると思われる。この用法は現代にまで及んでいることは周知の通りである。

このように見ていった場合，ドイツ語に現われた unter は「～の下」からの二次的な転用とは考えられず，すでにかなり古い時代に inter の意味として完全に人々の間に定着していることを示している。特に古高ドイツ語は語彙の面でも文体の面でもラテン語から甚大な影響力を受けたが，古来から存在するドイツ語にラテン語の影響によって新しい意味が加わる例は少なからずある。例えば hella（Hölle）は元来「死者の住まい」の意味であったがラテン語 infernus と gehenna（ヘブライ語からの借用語）の影響を受けて「地獄」へとその意味を変えた。riuwa（Reue）は元々「魂の痛み」であったが，ラテン語 contritio によって「後悔」となった。*under もドイツ語時代に入って inter との聴覚的類似性の為，inter の意味を借用付加したものと考えられる。そして古い意味と新しい意味がみごとに並存して現在に及んでいる。それに zwischen も untar zuisken「両者の間」から発展した比較的新しい用法である事も考慮に入れられよう。

参　考　文　献

① 辞　典

G. Autenrieth : An Homeric Dictionary, 1967

Benecke/Müller/Zarncke : Mittelhochdeutsches Wörterbuch 3 Bde. 1963

Bosworth/Toller : An Anglo-Saxon Dictionary, 1964

Der Große Duden, Etymologie, 1963

H. S. Falk/A. Torp : Norwegisch-dänisches etymologisches Wörterbuch 2 Bde. 1960

(18) Isidor von Sevilla（570頃—636）スペインのセヴィラの僧正。彼の著作をカール大帝の側近者たちがドイツ語（Reinfränkisch）に翻訳した。それらのドイツ語訳が Isidor の名で呼ばれている。

E. G. Graff : Althochdeutscher Sprachschatz 7 Bde. 1963
C. Hall/Meritt : A Consise Anglo-Saxon Dictionary 1969
E. Hellquist : Svensk Etymologisk Ordbok, 1970
F. Holthausen : Gotisches etymologisches Wörterbuch, 1934
F. Kluge : Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache, 1967
C. T. Lewis/C. Short : A Latin Dictionary, 1969
G. Neckel/H. Kuhn : Kurzes Wörterbuch zur Edda, 1968
H. Paul : Deutsches Wörterbuch, 1966
J. Pokorny : Indogermanisches Etymologisches Wörterbuch 2 Bde. 1959
A. Walde : Vergleichendes Wörterbuch der Indogermanischen Sprachen 2 Bde. 1932
Walde/Hofmann : Lateinisches etymologisches Wörterbuch 2 Bde. 1965

② テキスト

H. C. Andersen : Eventyr og Historier, 1971
W. Braune/E. A. Ebbinghaus : Althochdeutsches Lesebuch, 1969
H. Eggers (hrsg.) : Der althochdeutsche Isidor, 1964
Homer : Ilias
do. : Odysee
Neckel/Kuhn : Edda, 1962
W. Streitberg : Die Gotische Bibel, 1965

③ 研究書

A. Bach : Geschichte der deutschen Sprache, 1970
O. Behaghel : Syntax des Heliand, 1966
L. Bloomfild : Language, 1961
Braune/Ebbinghaus : Gotische Grammatik, 1966
K. Brugmann : Kurze Vergleichende Grummatik der indogermanischen Sprachen, 1970
H. Eggers : Deutsche Sprachgeschichte I.
Das Althochdeutsche, 1963
H. Hempel : Gotisches Elementarbuch, 1966
A. Heusler : Altisländisches Elementarbuch, 1967
H. Hirt : Handbuch des Urgermanischen 3 Bde. 1931
C. J. Hutterer : Die Germanischen Sprachen, 1975
泉井久之助 : 言語の世界 1970
H. Krahe : Indogermanische Sprachwissenschaft Bd. I. 1966
H. Krahe/W. Meid : Germanische Sprachwisseuschaft Bd. I. 1969

W. Krause : Handbuch des Gotischen, 1968

高津春繁 : 印欧語比較文法　1954

R. Kühner/L. Stegmann : Grammaik der lateinischen Sprache 2 Bde. 1971

A. Leskien : Handbuch der altbulgarischen Sprache, 1969

F. Maurer : Nordgermanen und Alemannen, 1952

H. Moser : Deutsche Sprachgeschichte, 1969

H. Paul : Prinzipien der Sprachgeschichte, 1970

F. Ranke/D. Hofmann : Altnordisches Elementarbuch, 1967

J. Wackernagel : Voriesungen über Syntax, Bd. 2, 1957